

◇開催日時 平成29年10月05日(木)19時～21時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野、新宮、島、中澤

◇内容

第5章「結論」『状況に埋め込まれた学習』ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳、産業図書株式会社、平成5年



1. 成員性とアイデンティティ構築の形式

- ・学習を実践共同体への参加の度合いの増加と見ることは、世界に働きかけている全人格を問題にすることである。 p.25
- ・学習とは、スキルや知識を獲得することを目的とした狭いものではなく、アイデンティティの形成を目的とした営みである。なにがしかの一人前になることを意味している。
- ・「私たちはアイデンティティというものを、人間と実践共同体における場所およびそれへの参加との、長期にわたる生きた関係であると考え。かくして、アイデンティティ、知ること、および社会的成員性は、互いに他を規定するものになる。」 p.30
- ・変わり続ける参加の位置（新参者から古参者へ）と見方（熟練に伴う見方の変化）こそが、行為者の学習の軌道であり、発達するアイデンティティであり、成員性の形態でもある。 p.11
- ・熟練者とみなされた実践者に受け入れられること、また彼らと交流することが、学習を正統的なものにしており、徒弟の視点から見て価値あるものになっている。また徒弟は、所属する実践共同を通して自分と社会のつながりを意識し、自分の将来像を描くことができるようになる。 p.96
- ・共同体と学習者にとっての参加の価値の最も深い意味は、共同体の一部になるということにある。つまり共同体の成員としてのアイデンティティを獲得するということ。 p.97
- ・熟練した実践者としてのアイデンティティの実感が増大していくということ。 p.98

2. 共同体における熟練の在所と組織

- ・実践共同体における熟練は親方だけでなく、古参者にも同僚にもある。
- ・新参者は、正統的な周辺性に十分長くいることで、実践の文化を自分のものにする機会に恵まれ、一般的な全体像をつくり上げることができる。
- ・手本には熟練者、完成した製品、さらに十全の実践者になっていく過程で一步先んじている徒弟が含まれる。
- ・学習の機会を組織化しているのは、徒弟の他の徒弟との関係であり、他の親方との関係である。徒弟自身の親方というのはあまりにも遠い存在であり、あまりにも尊敬の的であり過ぎて、新しい活動へのぎこちない試みでは関われないのである。 p.73
- ・学習それ自体が即興で生み出される実践なのである p.74
- ・共同体内での徒弟の社会的関係は、活動に直接かかわることを通して変化する。その過程で徒弟の理解と知性的技能が発達するのである。 p.76

- ・共同体は、参加者が自分たちが何をしているか、またそれが自分たちの生活と共同体にとってどういう意味があるかについての共通理解がある活動システムへの参加を意味している。 p.80

3. 権力、アクセス、および透明性の問題

- ・正統的周辺参加においては、まず新参者に対する成員性の保障が必要である。その実践共同体の一員であるという他者からの承認である。つまり安定的な居場所づくりが重要である。
- ・透明性があるとは、アクセスできること。
- ・様々な教育的資源にアクセスできることが重要である。古参者や同僚との会話は、道具への自由なアクセスが含まれる。新参者は古参者との会話や道具の使用を通して、実践共同体の文化的社会的特徴を理解していく（古参者との会話には、スキルだけでなく、実践共同体の歴史や社会的意義が含まれる。また道具にはその仕事の歴史が反映されている）。
- ・生産活動に用いる人工物はその使用が当たり前になっているため不可視であるが、それをを用いたことで対象物は可視化する。可視化したことで分析の対象となりうる。一方、対象物が可視化したことで、人工物の性能なども意識され、その改善にむかう。（例えば顕微鏡）両者の関係はコンフリクトと共働の両方を有する。コンフリクトと共働の相互作用は実践での学習全ての面で中心的である。 p.87
- ・アクセスの組織化に依存して、正統的周辺性は正統的周辺参加を促進するか、妨げるかに分かれる。

4. 実践共同体の発達のサイクル

- ・新参者の持続する参加、古参者になること、これらが学習のプロセスを支える力（新参者が古参者になるにつれて、実践共同体としての能力・生産力は向上する。また、仕事の進め方も洗練化する。一方、新参者がこれまでにないアイデアを持ち出すことで、古参者との間にコンフリクトが発生する。しかし、それによって仕事の手順が改善されたり、伝統を守りつつも社会のニーズに応じたスタイルに変化することで、実践共同体の発展をもたらす。学習とは、単なる知識やスキルの転移や実践共同体への同化のプロセスではない。

5. 実践共同体を意味づけるものの部分としての変化

- ・実践の理論では、認知とコミュニケーションのあり様も時間とともに変化していく。 p.27
- ・実践の中での語りはそれ自体実践の中で語ること（例えば、進行中の活動の進展に必要な情報の交換など）と実践について語ること（たとえば物語、共同体内での伝承）の両方を含んでいる。
- ・実践の中での語りには、関与すること、焦点を当てること、注意を移すこと、調整をもたらすことなど、知識や技能が含まれている。
- ・実践について語ることに、成員であることの証や成員としてのアイデンティティが含まれるとともに、そこに参加する者による共同的な内省によって、物語の洗練化を促進している。
- ・新参者にとっての目的は、正統的周辺参加の代用として語りから学ぶということではなく、正統的周辺参加への鍵として語りを学ぶということである。 p.95

6. 連続性と置換の矛盾におけるその変化の基礎

- ・問題状況が発生した場合、古参者たちは自らの類似した経験や伝承を語ることで、協同的に問題解決に携わっている。また、その場に相応しい語りができるようになることが、古参者としての能力の一部となっている。

- 実践共同体のために世代をまたがって連続性を達成する手段としての正統的周辺参加と、十全的参加者が「新参者はやがて古参者になること」によって入れ替えられることとしての、同じ正統的周辺参加における置換の過程との間には矛盾がある。 p.101
- 社会の変化に伴って実践も変化する必要があり、伝統にしばられていない新参者は、将来の担い手としてそれを促す必要性を感じている。
- 新参者は実践共同体内の協力者であると同時にライバルでもある。
- 新参者が成長するだけでなく、古参者も新参者に負けないように努力する。実践そのものが動きの中にある。活動、それに関与する人々の参加、彼らの知識、さらに彼らの将来の見通し、これらが相互構成的であるから、変化こそが実践共同体および彼らの活動の根本的な特質である。 p.104

